

国際シンポジウム 「近代日中関係史の中のアジア主義—東亜同文書院と東亜同文会—」

特集にあたって

愛知大学名誉教授 馬場 毅

2015年12月6日（日）午後1時から6時まで、愛知大学豊橋校舎研究館1階において愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催のシンポジウム「近代日中関係史の中のアジア主義—東亜同文書院と東亜同文会—」を開催しました。

これは2012年から開始している私立大学戦略的基盤形成事業「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の研究」の一環として「近代日中関係の再検討」グループが行ったものです。本グループはすでに2013年12月に国際シンポジウム「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係史の再検討」（報告論文に就いては『同文書院記念報』VOL22 別冊②、2013年12月に掲載）、2014年1月にワークショップ「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係の再検討」（そのうち野口報告論文に就いては、『同文書院記念報』VOL23、2015年3月掲載）を行っており、今回が3回目となります。

当日は以下の報告が行われました。

1. 「明治中期の貿易活動における日清貿易研究所の位置」
野口武(東亜同文書院大学記念センターポストドクター・愛知大学非常勤講師)
2. 「山田純三郎の孫文支援について」
武井義和(東亜同文書院大学記念センター研究員・愛知大学非常勤講師)
3. 「宮崎滔天と孫中山の広州非常政府の対日外交—何天炯の宮崎滔天に宛てた書簡を中心に—」
李長莉(中国社会科学院近代史研究所研究員)
4. 「大アジア主義から『脱亜入米』へ」
馬場毅(愛知大学名誉教授)
5. 「東亜同文書院の『復活』問題と霞山会」
堀田幸裕(霞山会文化事業部課長補佐・研究員)

今回のシンポジウムでは、東亜同文書院およびそれを経営した東亜同文会は、19世紀末、列強の中国分割の危機に際して、日中連携して「中国の保全と改革」を目指しました。このような思想や運動をアジア主義と考えました。しかしながら日本が台湾や朝鮮を植民地化し列強の後を追う中で、「中国の保全」は、列強と対抗して中国での勢力拡大という侵略の論理にも転化しました。つまりアジア主義は、中国やアジアと連携する側面と侵略の側面が存在し、アジア太平洋戦争時期まで続きました。今回のシンポジウムでは、各時代のアジア主義の発露である個別の事例を通して、日本におけるアジア主義の問題、アジアへの向き合い方を議論してみました。

具体的には、まず野口報告が、荒尾が中心となって経営した漢口楽善堂の時期（1886～1889年）を中心に、漢口楽善堂は中国商人と商業取引を行う一方で、日本の阪神京浜貿易

商社との間で委託販売を行っていたこと、そうした委託販売の背後に町田実一漢口領事による農商務省への情報提供があったことなどを、明治初期の大阪・関西経済の状況や、荒尾が中国渡航前に軍人として赴任した熊本の権力構造や経済策などを踏まえながら、詳細に述べました。

次に武井報告では、1910年代から1925年孫文逝去直前までの時期に、山田純三郎が行った孫文への財政的支援活動の流れと、そうした活動において山田が関わった人間関係について明らかにしました。それらを考える場合、1921年の「中日組合同規約」への山田の関与が、彼の活動を考える上で1つの転換点として捉えられるという指摘もなされました。

李報告は、孫文と共に革命に奔走した何天炯が、1920年から22年にかけて日本の友人である宮崎滔天に宛てた書簡を手掛かりに、孫文および広東政府と日本との関係について発表し、孫文が次第に日本に対する批判を強め、また日本の中国侵略が強まっていく中で、宮崎滔天は日本政府のそうした方針に反対したことなどが明らかにされました。

馬場報告は、戦前から現代に至るまでの日本とアジアとの関わりについて、明治維新後の近代日本の「脱亜入欧」下で誕生したアジア主義が、日中戦争開始後に「大アジア主義」へと変化し日本政府の政策とされたこと、一方、戦後GHQの占領下で「脱亜入米」が始まり、サンフランシスコ講和条約で主権回復した日本は冷戦体制下でアメリカに従属しながら、大東亜共栄圏構想に含まれていたアジアの国々と賠償・準賠償を通じて関わっていったこと、しかし日本は独自の視点や哲学でアジアに向きあってきたとはいえ、「脱亜入米」下の対米従属は今でも進行していると指摘し、今日的な問題点も含めて論じました。

堀田報告は、霞山会が東亜同文書院の復活を意識して、1966年に中国科や貿易科等を置く1年制の各種学校「東亜学院」を設置したものの、運営をめぐる問題などにより大学昇格を果たせないまま、1975年に各種学校としての歴史を閉じたことについての経緯を詳しく述べました(以上の各氏の報告のまとめは、武井義和氏のまとめを参照しました。記して謝意を表します)。

これらのうち、野口、武井、李(中国語版)、馬場の報告論文は、すでに『同文書院記念報』(VOL24 別冊 2015年12月)に掲載されていますので、本書には李報告論文(日本語翻訳文)、および事情により掲載できなかった堀田報告論文を掲載します。

なお「近代日中関係の再検討」グループとしては、本年今までの研究成果を対外的に出版することを計画しています。